

平成 28 年度分担研究報告書
HTLV-1 キャリア女性における乳汁栄養の選択が
産後 12 か月の育児ストレスに及ぼす影響

研究分担者 宮沢篤生 昭和大学医学部小児科学講座 助教

研究要旨

HTLV-1 キャリア女性は、母子感染予防のため出生してくる児をどのような栄養方法で育てるかの意思決定を求められる。自身がキャリアと診断されることに加えて、子どもに対する栄養方法の選択は、母親の妊娠中ならびに産後のメンタルヘルス及び育児ストレスに大きな影響を及ぼすことが危惧される。本研究では母親が選択した栄養方法が産後うつ傾向及び育児ストレスに与える影響について検討することを目的とした。

平成 28 年度研究では、2016 年 3 月末日までに HTLV-1 コホート研究に登録された症例のうち確認試験(WB 法)陽性者を抽出し、産後 12 か月時点での育児ストレス(PSI)を解析した。その結果、分娩前に母親が選択した栄養方法によって、産後 12 か月時の PSI 総得点、子側面総得点、親側面の総得点に統計学的な差は認められなかった。下位項目では「冷凍母乳」を選択した母親は他の栄養方法を選択した母親と比較して、子側面の「C5: 親に付きまとう/人に慣れにくい」、親側面の「P4: 親としての有用さ」、「P6: 退院後の気持ち」の 3 項目の項目点数が有意に低かった。

A. 研究目的

HTLV-1 の主たる感染経路は母子感染であり、母乳中に含まれる HTLV-1 感染リンパ球が原因でキャリアである母親から児へと感染を起こす。母子感染予防のため、HTLV-1 キャリアの女性には出生してくる児をどのような栄養方法で育てるかの意思決定が求められることとなる。栄養方法としては人工栄養(粉ミルク)、短期間(3 か月以内)母乳、冷凍母乳が挙げられるが、母親が栄養方法を選択するうえで、医療者からの各栄養の利点・欠点、ならびに母子感染の割合について適切な情報提供が必須である。またキャリアと診断されることに加えて、栄養方法の選択における母親の葛藤は、産前・産後のメンタルヘルスならびに産後ストレスに大きな影響を及ぼす可能性がある。

平成 26 年・27 年度の研究では HTLV-1 抗体陽性の女性が出生前に選択した栄養方法、ならびに実際に行った栄養方法が産後うつ傾向に与える影響について日本語版産後うつ評価(EPDS)を用いて評価し、栄養方法の選択が EPDS の結果に影響しないことを明らかにした。

本年度研究では、栄養方法の選択が産後 12 か月時点での育児ストレスに及ぼす影響について

検討する。

B. 研究方法

HTLV-1 コホート研究に登録された母体に対し、産後 12 か月の健診の際に育児ストレスインデックス(Parenting Stress Index)を記載してもらい、結果を解析した。解析の対象は確認試験(WB 法)が陽性であったもののみとした。

PSI は子側面、親側面から成り立っている。子側面は「C1: 親を喜ばせる反応が少ない」、「C2: 子どもの機嫌の悪さ」、「C3: 子どもが期待どおりにいかない」、「C4: 子どもの気が散りやすい」、「C5: 親に付きまとう/人に慣れにくい」、「C6: 子どもに問題を感じる」、「C7: 刺激に敏感に反応する/ものに慣れにくい」の計 7 項目、親側面は「P: 親役割によって生じる規制」、「P2: 社会的孤立」、「P3: 夫との関係」、「P4: 親としての有能さ」、「P5: 抑うつ・罪悪感」、「P6: 退院後の気持ち」、「P7: 子どもに愛着を感じにくい」、「P8: 健康状態」の計 8 項目である。

統計学的検討として、3 群以上の中央値の差の検討には Kruskal-Wallis 検定を、多重比較には 2 群間の比較を Mann-Whitney U 検定で行い、Bonferroni 法で補正した。

本コホート研究の実施にあたっては、昭和大学医学部における医の倫理委員会の承認を得た後、全国の研究協力施設においても施設ごとに倫理委員会における審議を行い、十分な倫理的配慮を行った。

C. 研究結果

1) 解析対象

2012年1月から2016年3月までに全国の92施設からコホート研究に登録された抗HTLV-1抗体陽性母体967例のうち、745例がWB法陽性であった。このうち産後12か月の育児ストレスの結果が登録されている205例を対象とした。分娩前に選択した栄養方法の内訳は母乳2例、短期母乳115例、冷凍母乳13例、人工乳75例であった。

2) 分娩前に選択した栄養方法とPSI(表1)

分娩前に選択した栄養方法によって、産後12か月時点でのPSI総得点、および子側面、親側面の各総得点に統計学的な差は認められなかった。下位項目では子側面「C5: 親につきまとう、人に慣れにくい」と親側面「P4: 親としての有用さ」、「P6: 退院後の気持ち」の3項目で統計学的な差が認められた。

表1 産後12か月の育児ストレスインデックス

分娩前に選択した栄養方法	母乳 (n=2)		短期母乳 (n=115)		冷凍母乳 (n=13)		人工乳 (n=75)		p
	中央値	範囲	中央値	範囲	中央値	範囲	中央値	範囲	
C1 親を喜ばせる反応が少ない	50	20-80	30	8-95	20	0-80	20	9-95	0.619
C2 子どもの機嫌の悪さ	50	10-90	19	1-90	9	0-70	20	1-95	0.252
C3 子どもが期待どおりにいかない	35	5-65	15	5-95	5	0-90	12	5-99	0.797
C4 子どもの気が取りやすい	40.5	1-80	15	1-95	10	0-50	15	1-95	0.320
C5 親につきまとう 人に慣れにくい	30	25-35	25	1-95	5	0-95	35	1-95	0.006
C6 子どもに怒りを覚える 頻りに怒鳴る	40	20-60	12	4-99	5	0-70	20	4-95	0.272
C7 頻りに怒鳴る ものに慣れにくい	55	30-80	30	1-99	5	0-85	30	1-95	0.076
子側面総点	300.5	111-490	211	24-530	71	0-470	181	24-555	0.155
P1 親役割によってまじる頻度	35		25	1-85	15	0-65	30	1-95	0.298
P2 社会的地位	30		20	1-95	10	0-80	30	1-99	0.666
P3 夫との関係	35		20	0-90	7	0-90	35	5-95	0.185
P4 親としての有用さ	52.5	40-65	30	1-90	10	0-30	21	1-99	0.008
P5 抑うつ・罪悪感	32.5	25-40	25	1-99	8	0-65	25	1-99	0.432
P6 退院後の気持ち	55	30-80	30	1-99	4	0-60	30	1-99	0.021
P7 子どもに愛着を感じにくい	35	10-60	20	3-95	5	0-85	10	3-95	0.570
健康状態	67.5	45-90	45	1-95	45	0-85	45	5-99	0.301
親側面総点	342.5	250-435	270	16-624	175	0-456	264	33-757	0.219
総得点	642	361-925	456	40-1084	275	0-935	432	80-1278	0.145

「短期母乳(n=115)」、「冷凍母乳(n=13)」、「人工乳(n=75)」の三群による多重比較の結果、「冷凍母乳」は他の二つの栄養方法と比較して、3項目とも項目点数が有意に低かった(図1)。

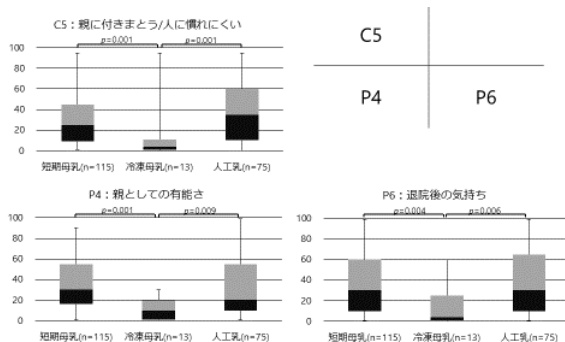


図1 選択した栄養法による多重比較の結果

D. 考察

本研究では、HTLV-1キャリア女性が出産前に選択した栄養方法が母親のメンタルヘルスならびに育児ストレスに与える影響を検証することを目的に産後12か月時にPSIを行った。

PSIの総得点は選択した栄養方法による統計学的な有意差は認められなかったが、下位項目では「冷凍母乳」を選択した母親で子側面、親側面ともに有意に低い項目が複数認められた。症例数は少ないものの、冷凍処理により長期間母乳を継続することが母の育児ストレス軽減に寄与している可能性が示唆される。

E. 結論

昨年度までの研究結果において出生前の栄養方法の選択ならびに実際の栄養方法によって、HTLV-1キャリア女性の産後のEPDS総得点には有意な差は認めなかった。HTLV-1キャリア女性に対するカウンセリングなどの支援が適切に整備されている結果と考えることができる。一方で「冷凍母乳」は母親の育児ストレス軽減に寄与する可能性があるが、他の栄養方法と比べて「冷凍母乳」を選択した母親の症例数が少ないことから更なる検証が必要である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 宮沢篤生、水野克己、板橋家頭夫: HTLV 1キャリア女性における乳汁栄養の選択がメンタルヘルスに及ぼす影響、第61回日本新生児成育医学学会学術集会、2016年12月2日(大阪)

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし